

横堅の三心を見る前に、法然の智具・行具の三心について聖光がどのように受け止めたかを知る必要がある。まず『徹選擇本願念仏集』の『選擇集』三心章の釈（『浄全』七、八九頁下）に次のようにある。

『観経疏』には、至誠心深心回向発願心とことごとく解釈しているが、有智の人ならばこれを知るのが無智の人はこれを知らない。そうであれば無智の人は三心を具足して往生するとはできないとの間に、法然の言葉として善導の意は一向専修の念仏を行じ、ひとえに臨終正念を期して退転懈怠けたいなければ自然に三心は具足すると言う。この解釈は正しく行具の三心と言える。聖光は『選擇集』の三心章についてこのことしか述べていない。聖光にとつては善導の釈した一見して具足することが難しいと思われる三心が自然に具わると聞いただけで、細かい解釈は無意味に思えたのかもしれない。この自然に三心を具足するということは他の著作においても強調される。例えば、『西宗要』の「第十一 三心具足文事」（『浄全』十、一五八頁下）では、智者が明らかに三心を学んだとしても三心の具わらない智者と三心の具わる智者がいる。たとえ三心を知らなくても信を取って念仏して往生しようと思うほどに自然に三心は具すると言い、一向専修とも知らず、仏の本願も知らず、ただ名号を称えて往生しようと思うところに自然と三心は具すると言う。これは善導の教えに相應し、自然と『浄土

『三部経』に相応するからである、と言うのである。

『念仏名義集』巻中（『浄全』十、三七二頁下）には、法然の言葉として善導の意を見抜いて、これを心得ればどんな無智の人でも簡単に三心を具することができると述べ、その条件として、よく極楽を願いよく阿弥陀仏に心を染め念仏することを挙げ、そうすることによって自然に三心が具すると言う。さらに法然以外に、簡単にどんな人でも念仏に心を入れて申せば三心が自然に具すると言った人はいなかったと述べ、その感激を表している。以上は智具の三心を否定的に述べているが、智具の三心を肯定的に解釈している文章もある。

『浄土宗名目問答』上（『浄全』十、四〇〇頁上）に念仏の行者はまず自ら三心を学び往生を決定したのち、他人に三心を教えて他人の往生を決定せよと言い、三心を知らずに念仏しても自ら迷い、人をも迷わすと言う。これが仏心と相応し、また善導の元意であると述べている。ここでは人を教えるための智具の三心が説かれているのである。しかしその後、至誠心等の三心の内容を解釈したのち行具の三心を説いている（『同書』四〇二頁上）。相伝であるとしたうえで末代の無智な人のために三心は具しやすくと説く。それは弥陀の本願であるから決定して往生極楽を得ようと深く信じれば、自然に三心を具すと言うのである。

以上のように聖光は智具、行具の三心の両者を認め、その役割を明示しているのである。しかも、聖光はこれらを意識しながらもさらに横堅の三心を説くのである。